

「復興と未来を担うグローバルリーダー育成事業」の一環として、1学年で会津大学研修が実施されました。

9月11日（金）、本校南体育館において「会津大学におけるロボット研究－アイガモロボットと災害対応ロボットを例に－」というテーマで、会津大学先端情報科学センターのロボット情報工学クラスター 成瀬継太郎 上級准教授による講義が行われました。会津大学におけるロボット研究だけでなく、世界で開発されている災害対応ロボットや歩行ロボットについて、映像を交えて詳しく説明していただきました。また、原発に入るロボットが高い放射線量によって故障してしまうことにも触れ、原発の廃炉に向けた課題の大きさに生徒達は関心を持って聴いていました。

【以下生徒の感想です】

人が行けない場所をロボットが代わりに行くことにより、様々な作業ができるので、毎年毎年ロボット工学は発展しているようだ。

2013年には日本の企業が DARPA ロボティクス・チャレンジで1位になり、その後 Google に買収されているというのは少し残念だが、それだけ注目されたということだからすごいと思った。日本のロボットも進化していると思うし、身近なところで活用されるのを見てみたい。同様に原発でも利用され、早く福島みんなが安心できるようになってほしい。私の将来はロボットと無関係だと思っていたが、色々なところで活躍するロボットを、たくさん知らなければならぬと思った。(女子生徒)

人が普段何気なくしていることも機械にとっては、数分かけて行うほど困難であるということがわかったが、だとしてもコンテストに出ているロボットは意志を持っているように見えたので技術の進化を知ることができた。福島の原子力発電所は人が入ることのできない場所の一つであり、ロボットでも放射能には負けてしまったりと、素晴らしい技術をもってしてもまだ課題があるということなので、将来のロボット技術開発に期待したいと思ったのと同時に、興味深い分野だと思った。(男子生徒)

災害の際などに活躍するロボットにはたくさんの要素が必要なのだということが分かった。また、ロボットで人間の歩行と同じような動きが再現できるということにとっても衝撃を受けた。

ロボットを作るのにも、たくさんの分野の学問が必要で、自分がそういった職に携わることがあるかもしれないということも分かった。

原子力発電所の廃炉についてもロボットが1つあれば良いのではなく、たくさんのロボットを使って作業を行う必要があり、長い時間がかかることが分かった。(男子生徒)

ロボットの動きが予想以上に遅かったことに驚いた。自分たちがスムーズに行っていた、車から降りることや道具を使うことがロボットにとってどれだけ大変なことか分かった。原子力発電所でロボットが作業していることは知っていたが、放射線量が高いところはロボットも作業できないということは初めて知った。人もロボットも作業できないなら、廃

炉に時間がかかりそうだと心配になった。あまり身近にロボットを感じたことはなかったが、今日の講義で、ロボットのおかげで成り立っている生活があるということがわかった。

(女子生徒)

ロボットというのは、事件や事故、災害の時に人間よりも色々なところへ行けるので、とても重要であることがわかった。

アメリカでは積極的にロボットコンテストを行っていて、とても良いと思った。日本でも技術は素晴らしいものがあるので、これからさらに役立つようなものができれば良いと思った。

私は、宇宙工学を勉強したいと思っているが、今回の講演で、ロボット工学の大切さに気づけたような気がする。(女子生徒)

災害用ロボットの実用化に向けて研究しているのは知っていたが、あそこまで技術が進んでいるとは思わなかった。ロボットの大会に出ているのはゆっくりとはいえ、あそこまで正確に動けるのはすごい。実際に災害が起きた現場に派遣されるのを見てみたい。

(女子生徒)